

大を図り、活力と創造性に満ちた地域社会の構築に寄与することを目的とした。

(2) 平城遷都1300年記念事業協会

平城遷都1300年記念事業協会は、平成17年（2005）5月16日に開催された設立総会において、「平城遷都1300年記念事業協会会則」等が制定され、当初は任意団体として発足した。その後、平成20年（2008）11月4日に開催された理事会及び設立総会において、任意団体から国家的事業として事業を実施する主体並びに各種助成金の受け入れ主体として相応しい公益法人に移行することを決定した。平城遷都1300年祭の開幕まで、1年あまりと迫る中、公益法人化することにより、社会的信用を高め、その後本格化する各種助成金や民間資金等を受け入れやすくするとともに、公益法人会計により、会計処理の透明性を高めることを狙いとしていた。法人化に当たっては現行の組織体制での公益法人への円滑な移行並びに機動的な運営が可能である社団法人とした

(図3)。

協会の構成は奈良県、奈良市、奈良県市長会、奈良県町村会、関西経済連合会、関西文化学術研究都市推進機構、近畿商工会議所連合会、関西経済同友会、奈良県商工会議所連合会、奈良県商工会連合会、奈良工業会、奈良県中小企業団体中央会、奈良県経済同友会、奈良県経営者協会の正副会長及び理事団体である14団体の正会員で構成された。

また、この協会は平成23年（2011）3月18日に開催された理事会及び社員総会において2011年3月31日をもって解散することを議決し、平城遷都1300年記念事業終了後に解散した。

(3) 平城遷都1300年祭収支

平城遷都1300年祭の収支計画は、総額約100億円で、平成21年（2009）4月21日開催の第1回社団法人平城遷都1300年記念事業協会総会・理事会において、事業計画と合わせて決定された。

収入では、公的負担は当初計画通り80億円、寄付

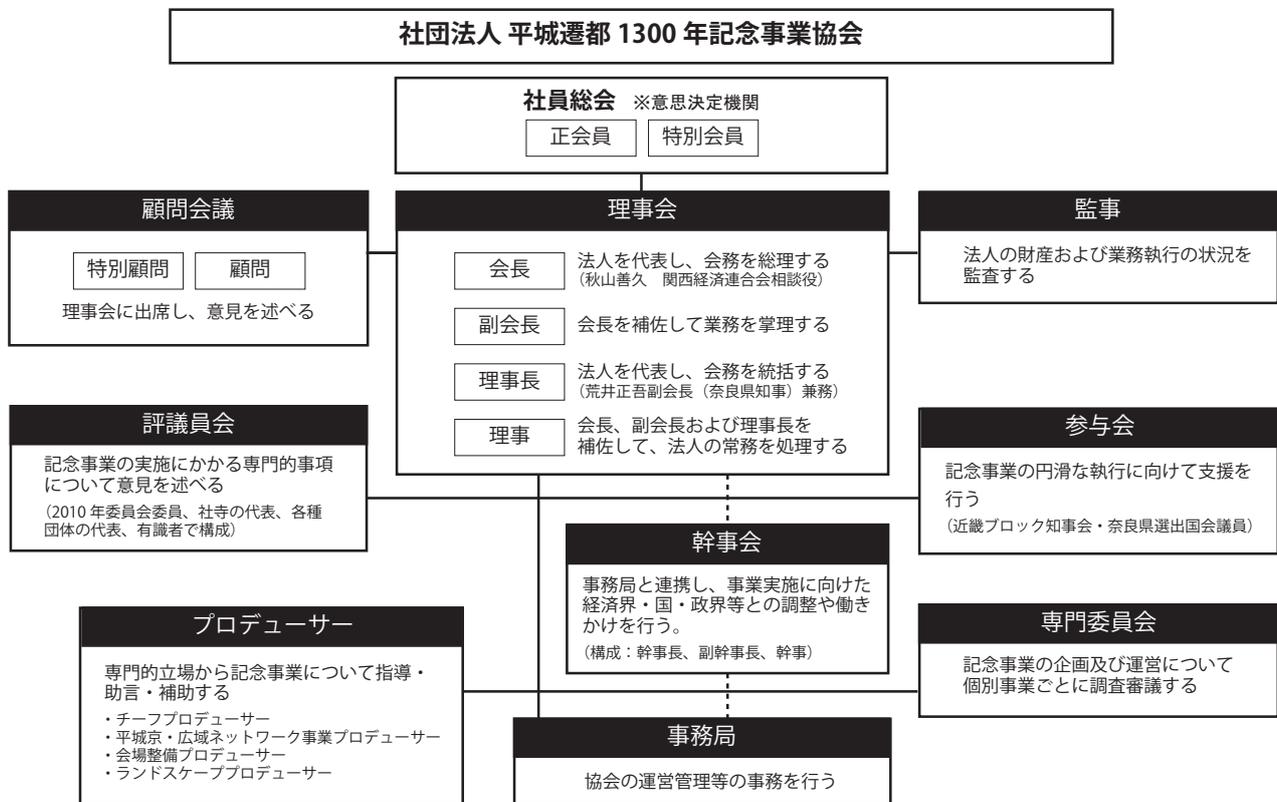


図3 事業協会組織図

金・協賛金等については、社団法人日本経済団体連合会、社団法人関西経済連合会、奈良県商工会議所連合会など関係各方面の協力を得て、企業・団体等からのご支援とともに協会事業収入の確保に努めた結果、計画を約9億円上回る約29億円となった。

一方支出では、主会場である平城宮跡への来場者が当初の想定を大きく上回ったことから、誘導・警備、暑さ対策など、来場者の安全対策等に万全を期した結果、平城宮跡事業費で、計画を約7億円上回る約80億円を支出し、総額で105億円を超えることとなった。なお、残余財産については、奈良県及び奈良市が協会に支出した負担金の比率（3：1）により案分し寄付した（表1）。

（4）平城遷都1300年協会事務局体制

事務局職員は、奈良県及び奈良市からの出向者に加え、記念事業の趣旨に賛同いただいた民間企業・団体からの出向者、そして協会プロパー職員で構成された。

特に民間企業・団体からの出向者は、協会設立当初の5企業・5名からスタートし、事業実施期間中には14企業・19名まで増加した。民間企業・団体におけるノウハウ等が随所で活かされた。

事務局職員数は、ピーク時で158名を数えた。これは平城京歴史館など平城宮跡会場において198日間無休で運営管理を行うほか、各部署において年間を通じて休日対応を行う必要があることから、協会プロパー職員を増員したことによる。

3. 平城遷都1300年祭の概要

（1）概要

平城遷都1300年祭は平城京遷都1300年を機に、日本の歴史・文化が連綿と続いたことを“祝い、感謝する”とともに、“日本のはじまり奈良”を素材に、過去・現在・未来の日本を“考える”ことを趣旨として、閣議了解（平成20年（2008）10月）、並びに全国的な推進組織「平城遷都1300年記念事業推進委員会」の設立（平成21年（2009）1月）等を経て、国家的・国民的事業として開催した（図4）。

表1 平城遷都1300年祭収支

●収入の部 [単位：百万円]

項目	計画額	決算額	備考
公的負担金	8,000	8,000	・奈良県 6,000 ・奈良市 2,000
寄付金 協賛金等	2,000	2,903	・寄付金・協賛金 1,615 ・※別途、物品 73 ・事業収入 748 ・各種助成金 540
合計	10,000	10,903	

●支出の部 [単位：百万円]

項目	計画額	決算額	備考
平城宮跡事業費	7,300	8,005	
催事・展示費	3,200	3,220	
会場整備費	2,700	3,076	
会場運営費	1,400	1,709	
県内各地事業費	600	542	
関連広域事業費	400	383	
広報・誘客事業費 (事前展開事業費)	800	819	
総務費	700	818	
予備費	200	0	
合計	10,000	10,567	

決算額欄には、仮決算額を記載
上記収支には、奈良県・奈良市が直接実施した平城京歴史建設費、シルクロード記念館改修費を含む

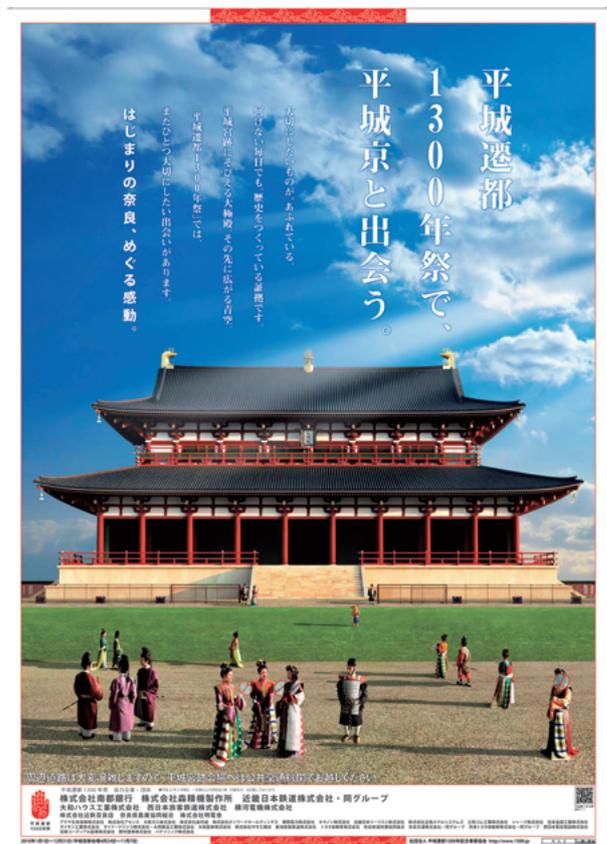


図4 記念事業広報ポスター

「平城遷都1300年記念祝典」、「東アジア未来会議奈良2010」を中核に、第一次大極殿が完成した平城宮跡を主会場に県内外において、官民の多様な主体者の参加・協力を得て、平成22年（2010）の1年間、平城遷都1300年を祝祭する様々な記念イベントを展開した（表2）。

(2) 事業構成とその内容

平城遷都1300年祭は、表2に示す通り以下の4事業で構成した。

①「平城宮跡事業」は、平城宮跡とその周辺で、通季の展示やイベントと、春、夏、秋の季節毎にフェ

アを開催し、歴史文化を体験できる場や機会を提供した。

②「県内各地事業」は、年間を通して奈良県内の国宝など歴史・文化に親しめる周遊型のイベントや、地域の特性を活かした新たなイベント、伝統行事などと連携しながら一体的に展開した。

③「関連広域事業」は、中核事業として展開する「東アジア未来会議奈良2010」をはじめ各種コンベンションやフォーラムの他平城京ゆかりの地域などの連携イベントを奈良県内外、国外も含めて実施した。

表2 事業年間スケジュール

平城遷都1300年祭全体概要

会期	2010.1.1～12.31 平城宮跡では4.24～11.7
会場	平城宮跡(主会場) 奈良県、関西等の各地
事業構成	①平城宮跡事業 ②県内各地事業 ③関連広域事業 ④事前展開事業
事業規模	参集規模 全体約2,140万人 平城宮跡会場 約363万人 全体事業費 約106億円

平城遷都1300年祭事業スケジュール

事業名	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
平城宮跡事業	通季イベント	4.24～11.7											
	各季フェア	春季 4.24～5.9			夏季 8.20～8.27			秋季 10.9～11.7					
県内各地事業		1.1～12.31											
関連広域事業		1.1～12.31											

平城宮跡会場の事業スケジュール

2010年		4	5	6	7	8	9	10	11	12	
大極殿完成記念式典		●4月23日									
通季	平城京歴史館	4月24日～11月7日									
	遣唐使船復元展示										
	平城京なりきり体験										
	平城宮跡探訪ツアー										
	平城京ゆかりの地域等の出展参加										
	企業・団体等の出展参加										
	衛士隊の再現										
	あをによしパレード										
	まほろばステージ										
春季	花と緑の「春風讃華」	4月24日～5月9日									
	平成の歌壇「花夢絵巻」	4月24日～4月30日									
	平城遷都祭2010	5月1日～5月9日									
夏季	光と灯りのフェア	8月20日～8月27日									
平城遷都1300年記念祝典		●10月8日									
秋季	大極殿音絵巻	10月10日～10月24日の週末等									
	東院庭園音絵巻	10月29日～11月6日の週末等									
	古代行事の再現	10月9日～11月6日の複数日									
	天平茶会	10月9日～11月6日									
	せんとかん鉄道	10月9日～10月17日									
	平城京ミステリークエスト	7月20日～11月7日									
	平城京カーニバル	●11月7日									

④「事前展開事業」は、プレイベントやマスコットキャラクターを活用した広報など、奈良への来訪や歴史・文化への興味と関心を高める取組を実施した。

4. 古代行事再現の取り組み

(1) 「平城京歳時記」から

平城遷都1300年記念事業において奈良時代の年中行事を再現する計画の兆しは、2004年度の段階で、奈良県平城遷都1300年記念事業準備室が推進した記念事業の主要プロジェクトの検討の中に「平城京歳時記」構想というかたちでみられていた。

この時点では、平城遷都1300年記念事業は、平城宮跡会場でのパビリオン群を中心とした大々的な博覧会計画を想定して構想が進められていた。

その後、2007年度半ばになっての計画見直しの中で、最終的に実施されたように平城宮跡会場での特別史跡の特性を生かしたイベント開催と、奈良県全域の文化遺産を紹介していくための大きな試みとしての広域事業開催という両輪による奈良の歴史文化継承・再生創造の事業へと方針が変更された。

平城宮跡での平城遷都1300年祭イベント開催には、その計画当初から、特別史跡であり、また世界文化遺産でもある遺跡の上で行われることへの批判があった。これは多くは観覧施設や、イベント施設、それらに伴う便益施設、さらに観覧路の新設等による遺構破壊への虞に対するものであったが、催事を含めてのいわゆる「イベント」を特別史跡という場所で行うことへの「ふさわしくない」という批判も多くあったように思える。

前者については、当然のことながら現存する平城宮跡内の諸施設と同様、もしくはそれ以上の厳しい条件の下、十分な配慮・調整の基に、設計作業から建設工事が進められたのであるから、その地下遺構への影響、遺構破壊についての虞については、まさに杞憂であったといえる。一方後者については、広大な平城宮跡をどのように活用していくかという問いかけであったように思うが、平城宮跡を中心とし

て奈良の歴史文化が如何に魅力的なものであったかを広め、さらに将来への継承を図ることを目的とした今回の平城遷都1300年祭は、まさに平城宮跡という場所にふさわしい事業であったと考える。

このような中、2008年度の政府予算案復活折衝によって特別史跡平城宮跡の国営公園化方針が事業決定し、平城宮跡は特別史跡としての性格に加え、国営平城宮跡歴史公園としての方向性を兼ね備えることになった。

(2) 古代行事を再現する意図

さて、この平城宮跡において行われる平城遷都1300年祭において、古代行事の再現を試みる意図は何処にあったろうか。

今回の事業の大きな目標は奈良の歴史文化の継承にある。当然のことながら、継承するためには保存し、活用する必要がある。そしてそのためには、それが何であるかの理解が必要であることは言うまでもない。

平城宮跡は昭和48年（1973）の遺跡博物館構想策定以降、この比肩するもののない遺跡の保存と活用を明確なテーマとして、その整備が進められてきた。

宮内省想定区、兵部省・式部省地区、東院庭園、朱雀門などに続き、平成22年（2010）4月には念願の第一次大極殿復原が完成し、公開されるようになった。また、平城遷都1300年祭に合わせ、大極殿院の回廊、南門が仮修景柵という形ではあるが、まがりなりにも表示され、大極殿院という空間の存在が目に見えるようになった。今後、さらに復原整備が進められ、より当時の平城宮の姿が目に見えるようになっていくであろう。

しかし、その空間には欠けているものがある。それは人である。ただし観覧者としての人ではない。当時にその場所で生きていた人であり、またその人の活動の様子である。

遺跡への理解を深めるためには、建物などを用いた復原はきわめて効果的である。どこにどんなものがあったのかを端的に示すことができるからである。しかし、復原された空間を理解するために、さ

らに一步踏み込んで考えてみると、その空間は何のために造られたのだろうか。そこでは何が行われていたのだろうかという疑問が生まれる。その疑問に答えることができる一つの方策として、人々の活動の再現が考えられた。

基本的に平城宮で行われた活動の再現を図る際には、その場所で行われていたことであれば、いわゆる年中行事としての儀礼・儀式ではなく、日常の再現も方向性としては考えられた。

しかしながら、今回の古代行事の再現事業には、学術的再現という理想に対して、その前に1300年祭への来場者に向けてのイベント性の高い、誘客のための催しとしての期待があったことも否めない。

この時点で、古代行事再現の目指す方向性はほぼ固まっていたといえよう。

(3) 再現計画策定への経緯

1) 具体的な計画へ

平成17年度に入り、奈良県平城遷都1300年記念事業準備室を母体として、奈良県、奈良市ほか民間団体の参画により、平城遷都1300年記念事業協会が設立された。そして、平成18年(2006)2月には『平城遷都1300年記念事業実施基本計画』が策定された。

この段階で平城宮跡における博覧会形式の、複数の展示パビリオンを核とする構成へと平城遷都1300年祭の計画が定められ、行事再現は展示パビリオンでの展示展開へと姿を変えた。これにより、当時の行事を再現する「平城京歳時記」計画は頓挫した形となったが、その意図は、歳時記ミュージアムという展示館の展示計画へ生かされることになった。

翌平成18年度を通して、この展示パビリオンを中心とする博覧会構想の実施計画策定が図られたが、平成19年(2007)5月には、荒井正吾知事就任に伴う平城宮跡の国営公園化方針表明、同年7月の記念事業新実施方針表明と相まって再び方針を転換することとなった。

2) 「平城遷都1300年祭 実施基本計画」

基本方針が変更されたことにより、2007年度後半からは新方針に基づく新たな事業計画の作成を行な

い、平成20年(2008)4月に新たな『平城遷都1300年祭 実施基本計画』を策定することとなった。

この基本計画では、平城遷都1300年祭の構成を

- ①平城宮跡事業
- ②県内各地事業
- ③関連広域事業
- ④事前展開事業

の4事業をもって構成すると定めた。

このうち平城宮跡を主会場とする平城宮跡事業では、以下の6イベントを開催の柱として定めた。

- ①平城遷都1300年記念祝典
- ②大極殿完成記念イベント
- ③(春季)花と緑のフェア
- ④(夏季)光と灯りのフェア
- ⑤(秋季)平城京フェア
- ⑥通季イベント

3) 「古代行事の再現」実施計画

「古代行事の再現」は、このうちの通季イベントおよび平城京フェアの核をなす事業として、「奈良時代に行われていた古代行事・儀式を今に楽しめるように再現し、往事の平城京の様子を体感していただくことを目的に実施することが示された。

この段階での実施予定の行事には先の「平城京歳時記」構想内の項目を継承しつつ、

(通季)衛士交代の儀・あをによしパレード

(秋季)騎射・射礼・相撲節会・外国使節団等の
歓迎儀式・蹴鞠・曲水の宴・平成散楽
の各アトラクションが想定されていた。

平成20年(2008)7月にはこの新事業計画に基づく事業実施委託先業者の選定を行った。

プロポーザル方式による選定作業により、「古代行事の再現」事業は株式会社アサツー ディ・ケイへの委託業務として実施することとなった。

(4) 事業計画の推進

古代行事の再現事業を検討、推進するにあたっては、事業年である平成22年(2010)までの残り期間を勘案して、主計画の骨子を事業協会で作成することとし、その計画および実施について、平成18年

(2006) 2月策定の基本方針に基づいた展示パビリオン計画の展示検討委員であった、京都女子大学文学部の瀧浪貞子教授に総合監修をお願いした。

2008年9月には「古代行事の再現」計画の検討を開始し、爾後の再現にあたっての基本方針を確認した。

また、検討を進めるにあたって必要な事柄については、その都度監修者の指示に基づき有識者に指導を仰ぐこととした。

計画策定にあたり指導、助言を頂いた方々は以下の通り(順不同:所属は当時)。

奈良女子大学文学部 館野和己教授、東京大学文学部 佐藤信教授、関西大学文学部 西本昌弘教授、奈良県立図書情報館 千田稔館長、奈良県立橿原考古学研究所 菅谷文則所長、京都市美術館 村井康彦館長、風俗博物館 寺石勲事務局長、京都橘大学猪熊兼勝名誉教授、奈良県立万葉文化館 宮崎隆旨参与、奈良文化財研究所 田辺征夫所長、文化庁文化財部記念物課 内田和伸文化財調査官。

加えて奈良文化財研究所の各位には、計画から実施にあたって多大な便宜を図っていただいた。

(5) 宮中儀礼の復興による文化遺産の活用に関する研究会

このような協会全体の動きに先立って、奈良文化財研究所景観研究室 内田和伸氏(当時)による「宮中儀礼の復興による文化遺産の活用に関する研究会」(科研費事業)が、2006年から開催されていた。平城遷都1300年祭の開催計画が明らかになる中で、協会事務局に対して研究会への参画案内があった。整備が進む平城宮跡の活用に関する取り組みを共に考えようという、まさに、平城遷都1300年祭にとっては有意義な提案であった。研究会では日本、中国、韓国における再現事例の調査、文献を中心とした古代儀礼の復元研究が行われた。

この中では騎射、射礼、正月七日節会、七月七日節会、釋奠などが対象とされた。

この研究会で進められた研究内容は、

- ・奈良文化財研究所2008「宮中儀礼の再現・復興

による文化遺産の活用」『埋蔵文化財ニュース』130号

- ・内田和伸編『大極殿院の思想と文化に関する研究』平成18年度～平成21年度科学研究費補助金研究成果報告書 2010
- ・阿部健太郎・内田和伸 2004「射礼とその復原に関する基礎的研究」『遺跡学研究』第1号 日本遺跡学会
- ・芳之内 圭・内田和伸 2006「五月五日節会の復興に関する研究」『遺跡学研究』第3号 日本遺跡学会
- ・佐藤健太郎 2007「七月七日節会の復興に関する研究」『遺跡学研究』第4号 日本遺跡学会に成果として発表されている。

この研究成果を基盤として「古代行事の再現」事業が推進されたといっても過言ではない。

(6) 奈良時代の儀式概要

奈良時代に行われた儀式・行事は当然のことながら『続日本紀』を基本文献として検討することになる。しかし、編纂方針であろうか、この編年書は行事関係について、あまりその詳細を示さない。場合によっては、例年通り行われていることについてはその記載を省いているのではないかと思わせるような所がある。それは、わざわざ理由立てて今年は行わないという記事を載せていることから何うことができる。

これら古代行事に関しては、大日方克己氏が『古代国家と年中行事』において詳細な研究を著されている。

先の研究会と共に、この書なくしては、今回の再現の基盤はなかったらと思う。

奈良時代三大儀礼

奈良時代に行われた儀礼のもっとも代表的なものは天皇即位式および元旦朝賀の儀である。

それに続く代表儀礼としては、正月十七日射礼、五月五日騎射、七月七日相撲節会が天皇観覧のもと行われる三大儀礼としてもとらえられていた。

また儀式ではないが、奈良時代の宮廷において行

われていた宴や芸能の類についても検討の対象とし記載の拾い出しを行った(表3)。

(7) 再現する儀式、行事の選定

奈良時代の天皇を中心とする律令体制下において構成されている儀式・行事の様子を当時のままに再現することが、大きな目標であった。

しかし、先に古代行事再現の意図で触れたように、今回の再現にあっては、主催者側として、まず多くの誘客への役割が期待された。そして、来場者に復原整備された遺跡の上で、古代の息吹を肌で感じつつ、楽しんでいただくことに、もう一方の目的があった。次いで、平城遷都1300年祭以降も引き続き行うことができる要素にも重きが置かれた。

前項に示したように、奈良時代の儀式は数多く、

その伝統が年中行事として現在に引き継がれている儀式も少なからずある。ただし、繰り返すようであるが奈良時代儀式の詳細内容は全くといってよいほど明らかでない。このためどのような儀式を採択し、どのように再現するかは重要な課題であった。

加えて採択にあたっては、再現を行うための場所が確保できることも大きな要素であった。

以上を併せて勘案し、今回の再現では、射礼(図5)、騎射(図6)、相撲節会(図7)の三大儀式、および曲水の宴(図8)、蹴鞠(図9)の2つの行事を選定した。これに加えて、宮内警護の様子を表現するために衛士の再現(図10)を項目としてあげた。

他に古代行事の再現とは少し方向が異なるが、来

表3 奈良時代宮中儀式一覧

名称	時期	場所	内容	備考	復原・再現の可能性
朝賀儀	元日	大極殿	元旦に天皇が大極殿で賀を受ける。		大規模な行事であり、CGなどの可能性を考える。
元日節会	元日	大極殿・朝堂院	朝賀の儀の後、宴を賜う。		「宴」の単独復原・再現は、観覧性が低いと判断される。
七日節会	1月7日	中宮・朝堂・南苑・大極殿・東院・内裏	天皇が臣下に宴を賜う。	後に青馬・白馬節会(あおうまのせちえ)となる。	再現は可能であるが、観覧性は低い。
御斎会	1月8日から14日	大極殿	天皇が大極殿に出御、金光明最勝王経を講読し、国家安穩を祈禱する。	称徳天皇の時に正月行事となるが、儀式として整うのは桓武天皇以降。	平和祈念行事としての実施は可能
正月十四日読経	1月14日	各国国衙	国衙において金光明経・最勝王経の読経を行う。		平和祈念行事としての実施は可能
御薪	1月15日	宮内省	百官が薪を宮中に奉る。正月の神聖な火を作る燃料とした。		再現ではなく、篝火を焚くことにちなんだ行事を行うことは可能と考える。
宴	1月16日	朝堂・南苑・松林苑	臣下に宴を賜う。古よりの歌垣との関係が深い。	足で大地を踏み歌舞する踏歌となるのは、平安時代嵯峨天皇以降である。	歌垣などと併せて歌舞を再現することは可能と考える。
射礼	1月17日	大極殿南門	親王以下貴族に弓を射させて、その成績に応じて賞を賜う。	大射(たいしゃ)ともいう。	弓を射る行事であり、再現は可能と考える。
歌垣	2月1日	朱雀門前	多数の男女が集い、歌に節を付けて歌い合う。天皇が出御し観覧した。	野山や市で行っていたものを芸能的に行ったと考えられる。	現代的要素を入れ、ミュージカル風に再現することは可能と考える。
三月三日節(曲水宴)	3月3日	松林苑・南苑等	天皇が水辺に行幸し、宴を賜う。文章生が集まり詩会を催すのが由来。のち曲水に杯を浮かべ、流れてくるまでに「曲水之詩」を詠む宴となる。		ある程度の再現は可能と考える。
五月五日節(端午之節)	5月5日	重閣中門・松林苑・南苑	菖蒲に由来。菖蒲を献上し宴を行う。騎射(うまゆみ)や、走馬(くらべうま)を行う。		騎馬により、弓を射る行事であり、再現は可能と考える。
六月祓	6月晦日	朱雀門前	夏越祓(なごしのはらい)ともいう。国家や万民の穢れを祓う。	大祓(おおはらえ)・道饗祭(みちあへのまつり)	協会事業としての実施は困難か。
七夕・相撲節会	7月7日	大蔵省・南苑	相撲を観覧後、宴を賜う。夜、南苑で七夕の詩を賦す。(賦七夕詩)		ある程度の再現は可能と考える。
新嘗祭	11月卯の日	宮中・西宮	新嘗祭		協会事業としての実施は困難と考える。
豊明節会	11月辰の日	宮中・西宮	新嘗祭中の行事・五位以上に禄を給う。	「設新嘗豊楽(とよのあかり)於西宮前殿」とあることに由来する。	観覧性が低い。
五節舞	11月辰の日	宮中・西宮	新嘗祭中の行事・五節舞姫が舞を舞う。内裏にて宴を賜う。	「天平15年…皇太子(後の孝謙帝)親舞五節」を始めとする。	五節舞自体の上演が可能である。
御曆奏	11月1日	大極殿	翌年の曆を天皇に献ずる。		観覧性が低い
冬至	冬至	大極殿など	天皇が冬至の賀辞を受ける。親王・臣下から珍奇な品を進上。文武百寮の五位以上らに宴を賜う。		観覧性が低い
大祓	12月晦日	内裏・中宮・朱雀門前など	国家や万民の穢れを祓う。		協会事業としての実施は困難か。
大嘗祭	天皇即位時	宮中大嘗宮撰地	天皇即位にあたっての儀式を行う。		再現は難しい
蕃客辞見	随時	大極殿・朝堂院	唐・新羅・渤海などからの使節との会見。		外国使節団歓迎式という形での再現は可能であると考える。
般若経転読	不定期	宮中・中宮	僧600名により般若経を読誦。		平和祈念行事としての実施は可能
平城宮皇城門の警護	常時	皇城門	衛士・兵衛・門部により、皇城門を警護。宮城内の警護が行われる。		パフォーマンスとしてある程度の再現は可能と考える。

・奈良時代に行われていた宮内行事を一覧した。
 ・大宝令・養老令、「日本書紀」、「続日本紀」、「万葉集」を中心に、平安時代の「延喜式」、「内裏式」などを一部参考にした。



図5 射礼



図9 蹴鞠



図6 騎射



図10 衛士隊の再現



図7 相撲節会



図11 あをによしパレード



図8 曲水の宴



図12 平成散楽

場者への楽しみを提供する手立てとして、奈良時代当時の文化交流や、華やかさをイメージするイベントとして、あをによしパレード（図11）、平成散楽（図12）の2つのアトラクションを実施することになった。

（8）再現の考え方

我々が古代宮廷の儀式としてイメージしているものは平安時代中頃以降の、儀式としてあるために整備された形式であるといつてよい。

その姿は『内裏儀式』、『内裏式』、『儀式』をはじめとするいわゆる儀式書、『年中行事絵巻』などの絵巻に描かれた姿、そして『小右記』、『御堂関白記』など当時の貴族の残した日記類の記録、また『宇津保物語』などの物語集から窺い知ることができる。

しかし、奈良時代の儀式概要でも述べたとおり、奈良時代に行われた儀式の詳細を記録している文献はなく、儀式、行事に参加する者がどのような次第に基づき動き、またどのような所作を行ったかについてはわからない。このため再現と称しながらも、なかなかその実態に迫ることが難しいことは十分に想定された。

このため事業実施にあたっては、学術研究の成果を踏まえ、来場者の歴史文化への関心と興味を深めるための華やかな演出性を加味したイベント事業として、当時何が行われていたのかを大筋で紹介することを方向性とした。

その際には、できるだけ奈良時代に近い時代の資料を中心に、しかし所作を明らかにするために現在に伝承されている神事・仏事をも参考しつつ検証を行い、何が明らかになっており、現時点では何がわかっていないかを明確にした上で、来場者の古代行事への正しい理解を促進することを目指した。

実際の構成制作にあたっては創作せざるを得ない部分が多くあったが、儀式の根幹、本筋を変えることなく紹介できるようにすることを考慮した。また、1300年祭終了後にも引き続いて実施できるような構成を作り上げることを課題とした。

儀式次第についてはそのような考え方で臨んだ



図13 再現した装束の一例

が、実際に使用する装束・道具についてもできる限りの再現を試みた（図13）。しかし、実際の使用を鑑み、目にとまらない箇所、利便性を求めた部分も少なからずある。また現在使用されている道具、装束をそのまま援用することもやむを得ずあった。

この事業構築の基本的な考え方として、まずどのようなことが行われていたかを実際の姿として紹介することが第一であると考えた。時間的、経費的、また場所的な制約の中で、未完成な、また創作に頼らざるを得なかった部分については、今後の学究の進展により明らかになった時点で補足、もしくは再構築していくことが必要であると認識している。

【参考文献】

- 1) 「平城宮跡歴史公園HP」より抜粋
- 2) 平城遷都1300年記念事業協会 2011『平城遷都1300年祭公式記録』
- 3) 大日方克己 1993『古代国家と年中行事』吉川弘文館